

リンゴ輸出の「9割以上が青森県産」「輸出検査に回ったリンゴの99%、輸出されたリンゴの97%は青森県産（農水省関係者非公式見解）」だと、6月21日付の当連載で紹介した。

5万トン時代へ 青森リンゴ輸出

18

これは、他県が輸出に消極的になっていくからではなく、本県産リンゴが次にあげる3点で輸出面の強みを持っているからである。

1点目は、通年供給が可能な産地であることだ。本県産リンゴの貯蔵

能力は37万ト（2015年10月現在、県調べ）あり、県外出荷実績の29万6千ト（14年産実績）を上回る。しかも翌年の8月まで長期貯蔵が可能なCA（酸素濃度を下げてリンゴの呼吸を抑え、鮮

度を保持する貯蔵方式）

冷蔵庫は、リンゴ用冷蔵庫全体の45%を占める。

長野県など他のリンゴ産地は、リンゴ用の冷蔵庫は持たず、年内でほぼ販売を終了するが、本県は春から夏の輸出は少なくなるものの、ほぼ1年

CA冷蔵庫で長期貯蔵



弘前市にある県りんご共販協同組合のCA冷蔵庫から運び出される県産リンゴ＝6月

1年を通して供給可能

を通してリンゴが供給できる産地である。

2点目は、中華圏の最大の需要期である旧正月

（年によって変動があり、1月下旬から2月中旬）に潤沢な在庫があることだ。1点目の理由と重なるが、他の産地はこの時期には輸出できるリンゴをほとんど持っていない。元々本県産リンゴは国内での産地間競争に巻き込まれないように、出荷時期を年明け以降に7割当てる作戦であったが、結果として輸出面ではこれが強みとなっている。

3点目は品種のラインアップが豊富であることだ。主力品種のサンふじをはじめ、贈答用に用いられる世界一、陸奥、有袋ふじなどの大玉高級品種やとぎ、金星、王林などの黄色品種など、他産地ではなかなか全てがそろわない。輸出が好調だからといって、結果まで何年もかかるリンゴ樹を簡単に増やすわけにもいかない。

国は今年5月に「農林水産業の輸出力強化戦略」を発表した。20年の農林水産物輸出額1兆円の目標を前倒しで達成するための方策が網羅されていて、各産地もそれに呼応した動きが活発になってくるようだ。これまでの本県産リンゴの優位さに甘えることなく今後のさらなる奮闘が必要だろつ。

（県りんご輸出協会事務局長 深澤守）